

# サウロの洗礼とアナニア

使徒言行録 9 : 1 - 19



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年5月5日

復活節第3主日

奈良基督教会にて

今日わたしたちがご一緒に目を注ぎたいのは、サウロが洗礼を受けたという事実です。今日最初に読まれた使徒言行録第9章に語られていました。

「18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、19 食事をして元気を取り戻した。」

これは「パウロの回心」として知られている箇所です、やがてこのサウロはパウロと呼ばれるようになり、イエス・キリストの福音を世界に広めることとなります。そのパウロの新しい人生の出発、彼の存在と働きの土台に、洗礼があった、ということに注目したいのです。

ところでわたしたちが生きていることの土台に洗礼がある、ということをおぼろげに思っているのでしょうか。わたしたちの中には、自分が知らない間に洗礼を受けていたという人があり（わたし自身がそうです）、自分で求め考え、あるいは勧められて洗礼を受けた人があり、またこれから洗礼を受けようとしている人がある。そのような違いはあったとしても、洗礼は、その人の人生の新しい出発だ、洗礼はわたしの存在と働きの土台だ、ということをおぼろげに知ってほしいと願います。

さて洗礼を受ける前のサウロは、熱心なユダヤ教徒でした。信仰に燃える人でした。回心の前から、洗礼を受ける前から、同じ神さまを信じていました。けれども洗礼以前の彼の熱心と信仰には非常に危ういものがありました。そのことが今日の箇

所の冒頭に現れています。

「1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。」

サウロのうちに情熱が燃えています。けれどもその情熱は暗い情熱です。間違っていると自分が考える人々を脅迫し、殺そうとする熱心と情熱。人を憎み滅ぼそうとする情熱。しかしほんとうの信仰的情熱とは、人を愛し生かすものであるはずですが、けれども自分ではどうにもならない。このサウロに、復活の主イエスみずからが出会ってくださって、彼を造り変えてくださるのです。イエスの内に燃える情熱がある。それこそ、人を愛し、人を生かそうとする情熱です。

ダマスコ途上で「4 サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」というイエスの声を聞き、光に打たれて道に倒れたサウロは、目が見えなくなり、人に手を引かれてダマスコに連れて行かれました。

「9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった」と記されています。ただ目がかすんで見えなくなったというわけではありません。これまで自分がこうだと信じてやってきたことすべてが、わからなくなったのです。自分は神に従って行動してきたつもりだったけれども、実は罪のない人々を脅迫し、命を奪ってきたのではないか。単に体調を崩して食欲がなくなったというわけではありません。自分の過去も現在も未来も、す

べて闇に閉ざされた。無実の人の血を流させてきたのが自分だとしたら、もう生きる資格も力もありません。

けれども、このサウロを新しく使命を与えて生かそう、生きさせようと決意されたのが、復活のイエスです。そのためにイエスは、ダマスコにいる弟子、アナニアを用いられます。

先に「サウル」と呼びかけられたイエスは、今度は「**アナニア**」と呼びかけられます。10節です。

「わたしはここにおります、主よ」とアナニアは答えました。

イエスがアナニアに命じられたのは、サウロの所に行って彼の上に手を置いて祈ることでした。アナニアは恐怖にかられます。アナニアはサウロがダマスコに向かっているのを聞いていました。自分もサウロに捕らえられて殺されるかもしれない。そのサウロに何が起こったかを彼は知りません。サウロに会うのは恐ろしい。キリスト教迫害の先頭に立ってきた人です。けれどもイエスはアナニアに「**行け**」と言われました。アナニアは祈りのうちに決意して出かけます。祈りつつ、目的地に向かいます。祈らなくては一步も進めません。

「17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。」

ここにアナニアの行動について四つの動詞が使われています。アナニアは「出かけて行った」、「ユダの家に入った」。「サウロの上に手を置いた」、そして「言った」。

出かけて行くことに恐れがあり、家に入ることに不安があり、敵対者サウロに手を置くことに非常な決意がいます。そしてサウロに語りかけることには特別の勇気が必要です。

けれどもそのアナニアの動作、行動の一つ一つに、復活の主イエスが共にいて共に働かれたのです。イエスが何かをするようにと人に命じられるとき、何もなしでその人を放り出されるのではありません。ご自分が派遣されたその人に対して責任を持ち、その人と共におられ、その人と共に働かれるのです。

サウロに手を置いたのはアナニアです。しかしアナニアをとおしてイエスが手を置いてサウロのために語りかけられます。

「悔いているあなたは赦される。あなたのために死んで復活したわたしを見るために、あなたは再び見えるようになれ。あなたの情熱は人を滅ぼすのではなく、人を生かすものとなれ。あなたはわたしの名を宣べ伝える者となれ。」

### 「兄弟サウル」

これはアナニアが呼びかけた言葉です。けれども彼の考えと力でこの言葉が出たのではない。アナニアをとおしてイエスが呼びかけられた。敵対者サウルではなく、迫害者サウルではなく、「兄弟サウル」とイエスが呼びかけられたとき、アナニアも意外なことにサウルを「兄弟サウル」と呼んでいたのです。

「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったので

す。」

単に視力が回復するわけではありません。これまで見えていなかったイエスを、これまで見えていなかった自分を、これまで見えていなかった隣人と世界を、新しく彼は見るのです。聖霊が、イエスの霊が、イエスの慰めと力と願いがサウロの中に満ちてきます。罪を赦されたことの感謝と、新しく生きると励まされた喜びと、新しい使命を授かったありがたさが彼の心と体に満ちて、自然に涙が溢れてきます。

その涙とともに、目からうろこが落ちて、彼は見えるようになりました。三日前、復活のイエスの光によって倒れて見えなくなった目は、今、復活のイエスの光によって新しく開かれた目です。

ここに至って彼は何をしたか。洗礼を受けたのです。

**「18そこで、身を起こして洗礼を受け、19 食事をして元氣を取り戻した。」**

ここから新しい彼の人生が始まりました。サウロからパウロへと彼は変えられていきます。一説によると、「サウロ」とは「求める」という意味、「パウロ」とは「小さい」という意味だそうです。心の底で真理を求めていたサウロは、復活のイエスと出会って洗礼を受け、自分の大きさではなく小ささを知らされた、ということかもしれません。しかし人の小ささ、弱さを通してイエスは働かれるのです。

彼は洗礼について、後に手紙の中でこう言っています。

**「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている」ガラテヤ 3:27**

洗礼を受けたというのは、ただキリストを思いキリストを信じるだけではなく、キリストをわが心と体に着せられて着たのだ。キリストを着ているから温かい、キリストを着ているから守られていて心強い。そしてキリストを着ているからいろんなことに気を使わず身動きがしやすい。

わたしたちが受けた、あるいは受けようとする洗礼は、サウロのように劇的ではないかもしれませんが。けれども本質においては同じです。復活のイエスがわたしに出会ってくださった。イエスはわたしを赦し、新しくわたしの目を開き、生きる意味と目的と使命を与えてくださった。キリストを着せられて自由となった。

アナニアがいなければ伝道者パウロは誕生しませんでした。パウロを誕生させたのは、アナニアと共に働かれた復活の主です。わたしたちのためにも、わたしの洗礼のために助けとなり祈ってくれたアナニアがいるのではないのでしょうか。

願わくは、わたしたちも人のために祈り、人の信仰と洗礼のために勇気をもって出かけて行くアナニアに、小さなアナニアになりたい。わたしたちの祈りと働きと共に、復活の主が共におられて共に働いてくださいます。

神さま、わたしたちがあなたのために働こうとするとき、勇気と力をお与えください。あなたがアナニアと共に働かれたようにわたしたちと共に働いてください。わたしたちを小さなアナニアにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン